

アンセルムスの *sola ratione* について

— 創造論・三一論的視点から —

矢 内 義 顕

I 序

「もし慎重に注視するならば、それ（最高の本性）のみが純一に、完全に、絶対的に存在し、他のすべてのものはほとんど存在せず、またかろうじて存在するにすぎないことが分るであろう」⁽¹⁾。

アンセルムスの目には神と被造物とがかくも隔ったものとして映った。この「非類似の境地」*regio dissimilitudinis*⁽²⁾にありながら、なおかつ人に与えられた使命が神を求めること *quaerere Deum* であるとするならば、それはいかなる理由によるのか。さらに人が神を求めねばならないとしても、どのような方法で *quomodo* 神を探究するのか。アンセルムスは *sola ratione*（理性・推理のみによって）と答へ⁽³⁾る。*sola ratione* とは何か。それはネガティブには「聖書の權威によらないこと」*sine scripturae auctoritate*、そしてポジティブには理性の必然的推理から得られる「必然的諸根拠によって」*necessariis rationibus* 論証を進めていく方法である⁽⁴⁾。彼がおかれていた世紀の知的世界にとって、これは革命的ともいえるものであった。しかし、それは確固たる基盤に基づいて、慎重に選択された方法であった。この基盤とは何か。

この問いを解明するためにテキストとして取り挙げるのは『モノロギオン』である。この作品の主題は「神の本質に関する黙想について、またこの黙想と関わりのある諸問題について」⁽⁵⁾一種の模範を示すことであった。だがこの作業は沈黙のうち⁽⁶⁾に自己と対話する *ratio* のみによって遂行される。神について自己と対話すること、それは神の理解と同時に自己の理解をも伴なわざるをえなくなろう。神認識と自己認識とはアウグスティヌス以来の究極的課題でもあった⁽⁷⁾。それゆえ『モノロギオン』

は神の本質について語りながら、ratioを扱い、ratioをテーマとせざるをえなくなる。そしてこの過程でratioはその始原的存在、本来性が極限的状态において問いなおされることになろう。⁽⁸⁾ Monologion すなわち Soliloquium⁽⁹⁾をテキストとして選んだのはこうした理由に基づいている。

本稿においては『モノロギオン』におけるアンセルムスの思索を必要な限り辿り、sola raioneの創造論的・三一論的基盤⁽¹⁰⁾を示し、彼にとってratioが信仰の光のもとで考えられていることを明らかにしようと思う。それによって何ゆえ人が神を求めなければならないのかという問いにも解答が与えられることになろう。

II ratio facientis から Verbum へ

1. ratio facientis から verbum へ

アンセルムスは『モノロギオン』第I章から第IV章で最高善 summum bonum、存在するすべてのもののうちで最高のもの summum omnium quae sunt が存在することを論証したのち、第V章からこれを創造的実体 substantia creatrixとして扱う。ここではプラトンのデミウルゴスの存在が否定され、また創造者とアイデアとを同一の実体に帰することによってキリスト教的創造論が展開される。まず、自己を通し per se、自己から ex se 存在する最高の本性と、他を通し他から存在する諸物以外に別の本性が存在し得る可能性一切を除去し、唯一の能動因としての最高の本性が他のいかなる能動因、道具因、質料因にもよらず、全事物を「無から」ex nihilo 創造したことを明らかにする。そしてこの世界のすべてが美しく、秩序正しく創られたことを見るとき、アンセルムスはこれが理性的 rationabiliter 作業であったと判断する。ここから第IX章における創造者の理性 ratio facientis へと推理が進められる。質料因という点からするならば「無から」創られた被造物も、創造者の理性という点からするならば「無から」と言うことはできない。何かが理性的に創られるには、創られる事物がいかなるもの quid で、どのような性質 qualia で、どのような仕方 quomodo で存在すべきかという範型 exemplum が創造者の理性に内在する。アンセルムスはこの exemplum を forma, similitudo, regulaとも言い換え、この中から formaを採用する。そしてさらに、彼は formaとは「創造者の理性の内における一種の表現」⁽¹¹⁾ quaedam in ipsa ratione locutio ではない

かと考える。ところでこの *forma* から *locutio* へと推理が進むとき、一つの比喩 *similitudo* が導入される⁽¹²⁾。技工 *faber* は何かを製作するにあたり、それを心の内で思い浮かべる。換言すれば、製作しようとするものを精神の内で表現する。創造者も同じようにこの世界を創るとき何らかの仕方ですべてを表現したのではないか。もちろん、それ自体で諸物が創られるための唯一の原因である創造者の内的表現と、何らかの原因を自己以外のものから得なければならない技工の表現との間には相違 *dissimilitudo* が存在する。アンセルムスは比喩を用いて最高の本性について語る場合、その射程を見きわめ、限定条件をつけたうえで思索を進めていくのである。このように、最高の本性の内にも「一種の表現」が存在することは明らかになる。

しかしここで彼は「一種の」という言葉を慎重に付け加えていることを忘れてはならない。*locutio* という語はいかなる意味で用いられているのだろうか。これは彼の言語論、認識論とも関わっている⁽¹³⁾。

アンセルムスはまず *locutio* を「事物を表示する語を考えるのではなく、……事物それ自体を精神の内で思考力によって認知すること」と規定する。そもそもわれわれが何かを表現する *loqui* 仕方には三通りある。(1) 感覚的の記号 *signa sensibilia* を用いる方法、(2) この記号を精神の内で非感覚的に考える方法、(3) 思考力 *acies cogitationis* すなわち肉体的想像力 *corporum imaginatio*、理性の理解力 *rationis intellectus* を用いて事物それ自体を認知する方法である。(1)、(2)の場合、一方は精神の外部で諸感覚を用い、他方は精神の内部で非感覚的に行なわれるとはいえ、いずれも「事物を表示する語」*vores rerum significativae* に関わっている。これに対し(3)は *vox* を表現することではなく、*vox* が指示している対象自体を表現するものであり、例えば「人間の感覚的容姿を呼び起こしたり、「死すべき理性的動物」という普遍の本質を表現することである。以上の三つは言語の形成過程であると同時に、認識の過程をも説明する⁽¹⁵⁾。すなわち、外感覚、内感覚によって精神の内に入った情報は肉体的想像力、理性の理解力によって再形成される。したがってアンセルムスにとって認識とは精神の内で対象をできるだけ忠実に再現することである。そして思考力によるこの活動が(3)にあたるわけである。この活動を感覚的の記号に置き換え、感覚的に表現するのが日常的表現であり、(3)は(1)、(2)の基礎となる言語の形

成作用である。「それゆえこれはまさに、事物の最も固有で主要な言葉と**言うべき**⁽¹⁶⁾であり」最高の理性の「一種の表現」とはこの言葉 *verbum* に他ならない。

2. *verbum* から *Verbum* へ

最高の本性の内における 理性から *verbum* へと到る 推理の過程は、言うまでもなく三位一体の第二位格 *Verbum* へと推理が収斂していく過程である。

しかし、ここで注意すべきことは *verbum* が *perfectio simplex* として使用されていることである。⁽¹⁷⁾ アンセルムスは『モノロギオン』第 XV 章で、諸々の語の中で被造物にも適用されかつ最高の本性にも適用し得る語はいかなるものかという課題を包括的に検討する。そしてそれらを「それである方がそれでないよりも絶対的によい」*ut ipsum omnino melius sit quam non ipsum* という場合、「それでない方がそれであるよりも何らかの意味でよい」*ut non ipsum in aliquo melius sit quam ipsum* という場合の二つに分類する。⁽¹⁸⁾ これが後のスコラ学における *perfectio simplex* と *perfectio mixta* の区別であり、前者はその概念の内は何らの不完全性も含まず、後者はそれを含むものである。最高の本性に適用される語はすべて可能な限り不完全性が除去されねばならない。それゆえ *verbum* も、最高の知恵の *verbum* として不完全性が除去され、*perfectio simplex* として用いられる。こうして *verbum* から *Verbum* へと推理が進む。そこで以下においてこの *Verbum* について検討する。

ところで *verbum* とはまず事物が存在し、それを精神の内でも再形成することによって成立するものであり、事物の *similitudo* である。しかし、*Verbum* の場合問題が生じる。どうして不変的本質を有する最高の本性の *Verbum* が可変的被造物に似ることができただろうか。それゆえ *Verbum* において事物から *verbum* へという秩序は逆転し、まず *Verbum* が存在しそれを模倣する *imitari* する形で被造物は存在するのである。そしてこの模倣の度合に応じて被造物は存在の位階を構成する。すなわち、純一、完全、絶対的に存在する最高の本性にのみ見出される存在の真理 *veritas existendi* を頂点として、⁽¹⁹⁾ 理性的実体、感覚を有する実体、そして赤裸々な存在 *nudum esse*、非存在 *non esse* という存在の一大連鎖が構築される。⁽²⁰⁾ しかも各々の事物は真理の分有によって真なるものとして存在し、またそれ以外にはあり得ないという意味で必然的に存在する。それゆえ、存在の位階は真理⁽²¹⁾

性の位階であり、各々の事物が有する価値の位階、意味の位階でもある。アンセルムスにとって存在と真理とは不可分のものであり、類似性 similitudo は真理の尺度である。

以上 Verbum が被造物から成立するのではないことが明らかになった。「だが、すべての言葉は何らかの事物の言葉である⁽²²⁾」。そうだとすれば、この Verbum も本来何ものかを表現しているのではなければならない。そこでアンセルムスは人間の精神とのアナロジを導入する。人間の理性的精神は、自己自身のみならず最高の知恵をも想起し、自己とこの知恵とを理解する。もしそうであれば、最高の知恵が自己自身を理解しないということがあり得ようか。さらに最高の知恵にとって理解すること intelligere と表現すること dicere とは同一のことである⁽²³⁾。こうして Verbum は成立し、この Verbum が「自己自身を表現するとき、創られたものすべてを表現する⁽²⁴⁾」のである⁽²⁵⁾。

この Verbum は永遠に自己と被造物とを表現する。しかし被造物は可変的であり、過去・現在・未来という時間の流れの中で生成と消滅をくり返す。それにもかかわらず、技術によって製作された作品は、それが消滅した後でもなお技術の内に存続するごとく、すべての被造物は生成消滅しつつも、なおその真の姿をこの Verbum の内に保っているのである⁽²⁶⁾。

「それら自体としては不変的理性にしたがって創られた可変的本質は、最高の霊の内においては第一の本質、第一の存在の真理として存在し、それに似ていればい⁽²⁷⁾るだけより真に、卓越して実在する」とアンセルムスは述べる。これまで『モノロギオン』におけるアンセルムスの思索を検討してきたのは、sola ratione の基盤を明らかにするためであった。そして、創造者の理性から始め、exemplum, forma, locutio, verbum, そして三位一体の内的生へと進み、創造者が自己と被造物とを永遠に表現する Verbum に到り、今再び創造者の不変的理性が現われ出発点に戻ったことになる。それゆえ、以上の考察をもとに sola ratione について述べるのが適切であろう。

III sola ratione

アンセルムスは『モノロギオン』において ratio という語を82回使用している。そ

の意味を大別すると (1)最高の本性における ratio, (2)推理・推論の能力としての理性, あるいはその能力そのもの, (3)理性の推理によって把握される根拠, 理由の三つである。これらは決して無関係ではなく, 有機的関連を持っている。

まず創造者の理性とは, これまで触れてきたように自己自身と全被造物とを理解し, 表現する唯一の Verbum である。そして万物がこの理性にしたがって創造されると, 各々はそれを模倣し, その類似性に応じて存在の位階を形成する。もちろんこれらの存在は, 「純一に, 完全に, 絶対的に存在する」かの本性に比較したとき, 「ほとんど存在せず, またかろうじて存在するに過ぎない」と言い得るほど脆弱なものである。それにもかかわらず, 人間の理性は被造物の中で最も創造者の理性に類似しており, 創造者が自己を知り, この世界を知るように認識能力を有している。理性は人間の魂の内において「君主また審判者」 princeps et iudex⁽²⁸⁾ であるとアンセルムスは述べている。

ところで最高の本性によって創られた世界が何らかの形でそれを表示し, 真理性を与えられ, 価値, 意味の位階を成していることはすでに触れた。人間の理性による認識は, この創造の秩序を逆から辿っていくことである。すなわち, 各々の実在を対象として推理を進め, その価値の世界, 意味の世界を登る。この思索の作業, ディアレクティカの作業は対象と一致し, また対象の与える真理性によって真なるもの, 必然的なもの, つまり「必然的諸根拠」rationes necessariae となる。こうした諸根拠からなる「論証の連鎖」concatenatio contextus argumentorum⁽²⁹⁾ のかなたに, 理性はそれまで対象としてきた諸実在が本来志向していたもの, すべての真理の根拠である創造者の理性を見出すのである。

創造者の理性, それは全存在の根拠であると同時に, 認識の主体には認識能力を賦与し, 認識対象には真理性を与えるものであった。

プラトンにとってイデアは, トマスの言葉を用いるなら「諸事物の生成の根源」principia generationis rerum であるとともに「諸事物の認識の根源」principia⁽³⁰⁾ cognitionis rerum⁽³¹⁾ であった。アウグスティヌスはこのイデアを rationes と呼ぶ。だがこの rationes は神と異なるものではなく, 神に内在するイデア, つまり Verbum である。アンセルムスの sola ratione とはまさしくこのプラトン=アウグスティヌスの思考世界を背景としており, またその中から生み出された方法と言

えよう。

IV 結語 (ratio と fides)

最高の本性、神が三位一体の内的生、創造の業において自己自身と世界を表現したように、人も ratio によって自己と神とを表現する。それは神の像 imago Dei として人が「なさねばならない」debere ことであり、またそのためにこそ人はその存在を神に「負っている」debere のである。⁽³²⁾

だが神と「非類似の境地」にある人が「言語を絶した」ineffabilis 神を理解し、表現しようとするとき、ratio の作業は不断の緊張を伴なうであろう。そもそも理解とはその対象の存在を前提として成立するものである。永遠に自己と世界を表現し、理解する神にとってその対象が失われることはない。だが人にとってそれは不可能である。ここに信仰の果すべき役割がある。⁽³³⁾

アンセルムスは、神を理解し、記憶するためには神を愛し、神に向かい tendere in, 神に信じ入らねばならない credere in と述べる。⁽³⁵⁾ 信じ入り、体験する experiri ことによって確実に対象が把握されてこそ理解は可能となるのである。⁽³⁶⁾

理性による理解、意志の働きである信仰、これらは神を求める魂の持つ二つの側面である。そしてこれらの能力をこの生においてなし得る限り發揮し、神を求め、見い出そうとすること、それが「理解せんがためにわれ信ず」credo ut intelligam⁽³⁷⁾ ということの意味である。

註

本稿の執筆にあたりアンセルムスの作品のテキストは、*Sancti Anselmi Opera Omnia*, F. S. Schmitt, Stuttgart-Bad Cannstatt 1968 を使用し、また『アンセルムス全集』古田暁訳 聖文舎 1980 の訳および注を参考にした。なおテキスト引用の際の略号は同書 839 頁に拠る。

- (1) Si enim diligenter intendatur, ille solus videbitur simpliciter et perfecte et absolute esse, alia vero omnia fere non esse et vix esse. *M c.* XXVIII 46. 2-3.
- (2) Augustinus, *Confessiones* l. VII c. X n. 16.
- (3) *M c.* I 13. 11. cf. *Cu* l. I c. XX 88. 5, 8; l. II c. XI 111. 28; c. XXII 133. 8. sola ratione という表現は全作品を通じてこの五箇所である。

- (4) *In* c. VI 20. 16-19; *M* Prol. 7. 7-11.
- (5) ……de meditanda divinitatis essentia et quibusdam aliis huiusmodi meditationi cohaerentibus……. *M* Prol. 7. 3-5.
- (6) *M* c. I 14. 5; c. XXXII 51. 11-12.
- (7) cf. Augustinus, *Soliloquia* l. I c. II n. 7.
- (8) cf. K. Kienzler, *Glauben und Denken bei Anselm von Canterbury*. Herder 1981 S. 71.
- (9) *P* Proem. 94. 12.
- (10) *P* c. I 100. 12-15 には創造論的・三一論的基盤とともに贖罪論的基盤が言及されている。これについては稿を改めなければならない。
- (11) *M* c. X 24. 25.
- (12) *Ibid.* 24. 25-27.
- (13) アンセルムスの locutio については、アウグスティヌス、ポエティウスなどを經由したストア派の *λέξις* の影響を読みとることができるかもしれない。cf. H. Kohlenberger, *Similitudo und Ratio*. Bonn. 1972 S. 193-5.
- (14) non cum voces rerum significativae cogitantur, sed cum res ipsae……acie cogitationis in mente conspiciuntur. *M* c. X 24. 27-29.
- (15) *M* c. XXXIII 52. 20-24: cf. *V* c. VI.
- (16) Illud igitur iure dicendum est maxime proprium et principale rei verbum. *M* c. X 25. 21-22.
- (17) cf. C. Vagaggini, La hantise des <rationes necessariae> de S. Anselme dans la théologie des processions trinitaires S. Thomas, *Spicilegium Beccense* I Paris 1959 pp. 103-139 および J. de Vries, *Grundbegriffe der Scholastik*. Darmstadt 1980 S. 102-7.
- (18) *M* c. XV 28. 26-28.
- (19) *Ibid.* XXXI 49. 3-6.
- (20) *Ibid.* 50. 3-7.
- (21) *Ibid.* c. XVIII 33. 18. cf. *V* c. II 177. 16.
- (22) Nempe omne verbum alicuius rei verbum est. *M* c. XXXII 50. 20.
- (23) *M* c. XXXII 51. 7-12.
- (24) *Ibid.* 50. 29-51. 3.
- (25) ……cum ipse summus spiritus dicit seipsum, dicit omnia quae facta sunt. *M* c. XXXIV 53. 21-22.
- (26) *M* c. XXXIV 53. 17-20.
- (27) Etenim in seipsis sunt essentia mutabilis secundum immutabilem

rationem creata; in ipso vero sunt ipsa prima essentia et prima existendi veritas, cui prout magis utcumque illa similia sunt, ita verius et praestantius existunt. *M* c. XXXIV 53. 25-54. 1.

- (28) *In* c. I 10. 1.
- (29) *P* Prooem. 93. 5. cf. *Ca* c. XX 264. 22-23.
- (30) Thomas Aquinas, *Summa Theologica* I q. 15, a. 3. cf. Platon, *Res Publica* 508 E-509 B.
- (31) Augustinus, *De diversis quaestionibus LXXXIII* XLVI, de ideis.
- (32) *M* c. LXVIII. 78. 14-17.
- (33) cf. *Ibid.* c. XLV.
- (34) *Ibid.* c. XLVIII. 63. 16-24.; c. LXIII 73. 16-18.
- (35) cf. *Ibid.* c. LXXVI.
- (36) *In.* c. I 9. 5-8.
- (37) *P* c. I 100. 18.